

英語における前置された名詞句のもつ情報値についての一考察

稲 毛 逸 郎

An Analysis of Information Value of Preposed NPs in English*

Itsuro INAGE

1. はじめに

英語には、次の例が示すように文頭への名詞句の移動(NP Preposing)を想定することにより特徴づけられる構文が存在している。

- (1) a. I find *her writing* unintelligible.
b. *Her writing* I find unintelligible.
- (2) A: You should take up swimming for relaxation.
B: *Relaxation* you call it!
- (3) a. Her name is Mary Jones.
b. *Mary Jones* her name is.

(Quirk *et al.* (1985:1358))

これらの例が示すように、文中の様々な構成素が文頭の位置に前置される可能性がある。(1b)では、動詞 *find* の目的語の名詞句 *her writing* が、(2)の B の発話では、目的格補語である *relaxation* が、また、(3b)では、主格補語である *Mary Jones* が、それぞれ文頭の位置に移動されたものと考えられ、一般的にこれらの構文は話題化(topicalization)にかかわる構文として特徴づけられている。¹

これら話題化構文のもつ機能についての分析は、Quirk *et al.* (1985)に見られる記述に代表されているようである。

Fronting is the term we apply to the achievement of marked theme by moving into initial position an item which is otherwise unusual there. ...Such a fronted item is frequently an entire sentence element. The reason for fronting may be to echo thematically what has been contextually given.

(Quirk *et al.* (1985:1377))

つまり、先行文脈によってすでに与えられた何らかの要素を、それに後続する文のテーマ(theme)として捉えなおして繰り返すことによって、文脈の流れをより円滑にする機能をもつという分析である。²

この話題化構文について、Gundel(1974:75)は、次のように2つのタイプが存在すると主張している。すなわち、すでに話題となっている要素を話題化する「話題話題化 (Topic Topicalization)」構文と、情報の焦点となっている要素を話題化する「焦点話題化 (Focus Topicalization)」構文である。³ これらの典型的な例として、(4)と(5)を挙げることができる。(太字体の部分は、その文の中で最も強い強勢が置かれることを示す。)

<Topic Topicalization>

(4) A: What about John?

B: John he called.

<Focus Topicalization>

(5) A: Who did he call?

B: John he called.

(4)では、Aの発話においてすでに話題となっている John が、Bの発話の文頭の位置に生じ、話題をそのまま受け継ぐ形になっており、この前置された John は最も強い強勢は伴わない。それに対し、(5)では、すでに話題化されたものではなく情報の焦点である John が話題化されており、最も強い強勢を伴って発話されるという分析である。⁴ 特に、(5)のタイプの構文については、Prince(1981:220)では 'Focus Movement'、Chafe(1976:49)では 'preposing with a single focus of contrast' と呼ばれている。⁵ 同様な例が、村木・斎藤(1978:196)でも指摘されている。

(6) A: What do you like?

B: *Bill* I like.

(7) A: What did Sam give Helen?

B: *A book* he gave her.

一般に、(5B), (6B), (7B)の発話に見られるような焦点話題化構文は、次に示すようなパラフレーズが可能であると考えられている。(Gundel(1974:75))

(8) a. It was John that he called.

b. It is Bill that I like.

c. It was a book that he gave her.

しかしながら、実際のデータを詳しく見ていくと、Gundelの主張は維持できないことがわかる。次の例が示すように、(9B)の発話を *it-cleft* の形に言い換えると(10B)のように容認不可能な文になってしまう。(Ward(1988:21))

- (9) A: Where can I get the reading packet?
B: In Steinberg. *Six dollars* it costs.
- (10) A: Where can I get the reading packet?
B: In Steinberg. #It is *six dollars* that it costs.⁶

同様のことが、次の(11), (12)についても言える。

- (11) A: Have you finished it yet?
B: *Half of it* I've read.
- (12) A: Have you finished it yet?
B: #It is *half of it* that I've read.

(Ward(1988:20))

このように、これまでの研究で焦点話題化構文と分析されてきているものについては、その文頭の位置に前置された名詞句の特徴づけに関して、いくつかの問題点があるように思われる。本稿は、従来、焦点話題化構文として分析されてきたものについて、特にその前置された名詞句の談話の流れにおいて果たす機能について再考することを主たる目的とするものである。⁷

2. 情報構造からみた前置名詞句の特徴

Prince(1984:259)は、話題化構文に対して次のような語用論的制約 (pragmatic constraint)を提案している。

- (13) The preposed constituent must represent either an entity that is already evoked in the discourse, or else it must stand in a salient set-relation to other evoked or inferrable discourse entities.

つまり、文頭の位置に前置される構成素は、先行する談話の中ですでに喚起されたものを表すか、または、そのすでに喚起されたものやそれから推測されるものと際立った「要素と集合」の関係を表すものでなければならない、という制約である。もっと簡単な言い方をすれば、これらの名詞句は談話上(従来の言い方に従えば)「旧情報」を表すものであることが要求されていることになる。⁸ 次の例(14B), (15B), (16B)の発話における前置された名詞句 *Hotdogs*, *this song*, *the cryptogram* は、すべてこの制約(13)に従っていると考えられる。

- (14) A: What do you take on hotdogs?
B: *Hotdogs* I eat with mustard.

(福地 (1985:75))

- (15) A: Do you like this album?
B: Yeah, *this song* I really like.

(Ward(1988:56))

(16) A: Did you get more clues to the crossword puzzle?

B: No. *The cryptogram* I can do like that. The crossword puzzle is hard.

(Ward(1988:57))

前節で見たように、焦点話題化構文における前置された名詞句は、その文の中で最も強い強勢が置かれるという理由で、従来の言い方をすれば新情報の焦点を表すということである。そうすると、語用論的制約(13)との関連からは、次のような焦点話題化構文の前置された名詞句のもつ情報値については、どのような説明が可能であろうか。

(17) a. Computer whiz kids — *hackers* they're called — are more and more obtaining access to computer programs which are strictly off limits.b. Computer whiz kids — #it is *hackers* that they're called — are more and more obtaining access to computer programs which are strictly off limits.

(Ward(1988:21))

(18) A: Where can I get the reading packet?

B: In Steinberg. *Six dollars* it costs.

(Ward(1988:107))

(19) A: Where can I get the reading packet?

B: In Steinberg. #It is *six dollars* that it costs.

(Ward(1988:21))

これらの例においては、それぞれ情報の焦点である要素が前置されているという点では焦点話題化構文として分類できるものであるにもかかわらず、(17b), (19B)のような言い換えは許されないのである。

ここで、われわれは、情報の焦点という視点と、その情報の焦点が表す談話上の情報の値という視点を分けて考える必要があるそうである。この点について、次節で詳しく見ることにする。

3. 焦点話題化構文の前置名詞句の情報値について

ここでは、従来、焦点話題化構文と分析されている構文の前置された名詞句について、それらのもつ情報値を先行する談話との関係で詳しく見ていくことにする。まず、次の例を考えてみよう。

(20) A: What do you like to eat?

B1: *Tuna sandwiches* I like to eat.

B2: It is *tuna sandwiches* that I like to eat.

(21) A: What did John give to Mary?

B1: *A doll* he gave her.

B2: It was *a doll* that he gave her.

従来の分析では、(20), (21)のそれぞれのB1の発話における前置された名詞句 *tuna sandwiches*, *a doll* は新情報を表し、かつ、情報の焦点を表しているといふとみなされ、従って、各々のB2の発話に見られるような *it-cleft* 構文への言い換えが可能であると考えられている。それゆえ、これらは焦点話題化構文の典型とされる例である。これまでの研究では、次の福地(1985:77)に見られるような分析が一般的である。「話題化というからには、何らかの意味で旧情報を担う要素が話題になるのが自然である。ところが、比較的まれではあるが、全く新しい情報をもつ要素が前置されることがある。これは焦点の話題化 (Focus Topicalization) と呼ばれる。」

この分析には、少なくとも、2つの問題点が含まれていると考えられる。1つは、「全く新しい情報をもつ要素」とはどのような次元での情報値の査定 (assessment) なのかという点であり、もう1つは、「情報の焦点=新情報を表す要素」という図式が自明の前提として含まれている点、もっと言えば、談話の視点から見れば、ある要素についての「情報の焦点の認定」と「新旧情報値の査定」が別の次元で行われる可能性があるという認識が欠けている点である。⁹

まず、第1の問題点から考えてみよう。

(22) A: I'm giving my mother a towel for her birthday.

B: *A towel* you're giving her?

(Ward(1988:121))

(22B)の前置されている名詞句 *a towel* は、Bの発話内において、つまりBの発話を先行する談話から切り離して単独の文として分析した場合には、他の要素よりも相対的に重要な意味情報をもっているという点では従来の規定に従い「新情報」と分析されうるかもしれない。しかし、それは表現形式という点からはAの発話の *a towel* の繰り返しであり、談話の流れからみると「旧情報」と判断されるべきものである。ただ、それに後続する要素 (*you're giving her* の部分) が、いわば、余剰的 (redundant) な情報しか表していないという理由で、*a towel* という同じ言語形式にあえて情報の焦点を置き、かつ、文頭の位置に移動させることによって、一種の「驚き」や「狼狽した気持ち」を表していると考えられる。同様のことが、次の例についても言える。

(23) A: Well, grandson, tell me what you've been up to all these years.

B: I'm in medical school.

A: *Medicine* you're studying, eh?

(Ward(1988:121))

(23)では、最後のAの発話における*medicine*は、直前のBの発話の*medical school*で学ぶ学問分野の名称としては当然予測可能なものであるが、その要素にあえて情報の焦点を当てかつ文頭の位置に置くことによって、AがBの発話内容をいわば好奇心をもって聞こうとする態度を表す、という効果を生み出していると考えられる。これら2つの例は、談話上は「旧情報」の値を表していると考えられる名詞句が前置され、かつ、話題化構文内では情報の焦点として機能する可能性があることを示唆している。

次に、第2の問題点について考えてみよう。次に示す例は、前置された名詞句が新しい言語形式であっても、談話上は「旧情報」を表していると考えられるものである。

(24) A: The terrorists will not even release an expectant woman.

B: What? A *pregnant woman* they won't release.

(Ward(1988:119))

(25) A: I voted for the Republican presidential candiate in 1984.

B: Oh my God! *Reagan* you voted for?

(Ward(1988:119))

(26) Colonel Kadafy, you said you were planning on sending planes — *M-16s* I believe they were — to Sudan. Am I correct?

(Ward(1988:76))

(27) A: Are there black kids in that school now?

B: Not many. I had two really good friends. *Damon and Jimmy* their names were.

(Ward(1988:113))

これらの例では、それぞれのBの発話において話題化され文頭の位置に生じている名詞句は情報の焦点として機能してはいるが、直前の談話に現れている名詞句と同一指示の関係をもつものである。(各々の例のイタリック体の名詞句は、先行する談話の太字体の名詞句と同じ実体を表していると考えられる。)したがって、前置されている名詞句は、情報の焦点として判断されるのはあくまで話題化構文の境界内のことであり、他方、また別の次元として、談話における情報値としては旧情報を担っていると分析されるのが妥当であろう。¹⁰

ここで、文頭の位置に生じている名詞句と先行文脈との意味関係を、さらに詳しく見ていくことにする。

- (28) A: How do you like your new job?
 B: I like a lot of it. *Parts of it* I don't like at all.
 (Ward(1988:58))
- (29) A: Which staples should I use?
 B: Use the half-inch ones. *The smaller ones* we never use.
 (Ward(1988:58))
- (30) I saw a film last night. *A Fellini film* it was.
 (Ward(1988:77))
- (31) A: I want to visit all the capitals of the Mideast.
 B: *Beirut* you want to visit?
 (Ward(1988:121))

(28)では、Bの発話の *Parts of it* は、Aの発話における *your new job* の一部分を表していると考えられる。(29)では、Bの発話の *the smaller ones* は、Aの発話の *staples* で表されるものの集合のうちその一部分あるいはサブタイプを表していると考えられる。(30)では、2番目の文の前置された名詞句 *A Fellini film* は、前の文の *a film* に部分的に情報を付け加える(*Fellini*)ことによって表現されている。(31)では、Bの発話の *Beirut* は、Aの発話の *the capitals of the Mideast* で表される集合体(都市名)の一部を構成するものを表していると考えられる。

これらの例を考えると、従来、焦点話題化構文と分析されているものであっても、文頭の位置に前置される名詞句は、何らかの形で先行文脈に関係づけられる情報を表しているようである。すなわち、文脈の流れから予測のつかないような、全くの新しい情報(*brand new information*)を表すことは許されないように思われる。¹¹ これまで見た例について共通して言える点は、情報の焦点が当てられ、かつ、文頭の位置に生じている名詞句は、先行する談話において何らかの形ですでに喚起されたものの表す集合体のうち、その一部を表すものであるということである。したがって、表現形式としては新しいもの(*new referents*)であるとしても、その名詞句が表す情報値(*information value*)としては、談話上は、新情報とは言えないのである。¹²

以上の考察から、焦点話題化構文における前置された名詞句も、談話上の情報値としては、全く新しい情報を表すのではなく、すでに喚起された情報値を表すものであると言える。この主張をさらに支持すると考えられる例を見てみよう。次の例は、焦点話題化構文の前置された名詞句が情報の焦点でありかつ新情報を表しているもので、談話上、容認不可能になるものである。談話の流れの中で全く新しい情報を担う名詞句が話題化されるために、Bの発話が容認不可能になっている。

(32) A: What can you tell me about John?

B: *John* Mary kissed.

(Rodman(1974:440))

(33) A: What can you tell me about John?

B: Nothing. #But *Bill* Mary kissed.

(Rodman(1974:400))

(32)の場合、Aの発話において John はすでに話題として提示されており、Bの発話においてそれを話題化して文頭の位置に置くことはきわめて自然な談話の流れであると考えられる。それに対し、(33)の場合は、Aの発話においてすでに確立されている話題である John ではなく Bill を話題としてとらえて表現している結果、Aに続く発話としてのBは容認不可能なものになっていると考えられる。全く同様のことが、次の2例についても言える。

(34) A: What did John give to Mary?

B1: #These books, John gave to Mary.

B2: John gave Mary these books.

(Garcia-Zamor(1972:103))

(35) A: Do you want to see a movie?

B1: #*The dog* I have to walk.

B2: I have to walk *the dog*.

(Ward(1988:74))

これらの例においては、B2のような、話題化構文ではない通常の語順の文であれば容認されることになる。

この点をさらに支持すると思われるのは、文中の名詞句が文頭に移動されて話題化されている文を用いて、新しい談話を始めることが許されないという現象が見られることである。

(36) #Your car, we're going to have to repossess.

(Hankamer(1974:221))

つまり、話題化構文であれ焦点話題化構文であれ、文頭に現れる名詞句が先行する談話の中で示されている情報を何らかの形で受け継いでいなければならないという理由で、その話題化構文が全く新しい談話の冒頭に現れることは、一般的には許されないのである。¹³

以上の考察から、話題化構文における文頭の位置に生じる名詞句は、談話上、全く新しい情報を表すことはできないという分析が妥当であると言える。¹⁴ 話題化され文頭に生じている名詞句は、談話上はすでに何らかの形で与えられた情報を受け

継ぐ性質をもつものである。ただし、ごく稀に、それが情報の焦点になり得るのは、それに後続する要素が余剰的な情報しか表さない、つまり、省略されてもかまわないような、あまり重要でない情報しか表さない場合に限られると考えられる。したがって、先に示した Prince(1984) の話題化構文の前置された要素に対する語用論的制約(13)は、かなり一般的妥当性の高いものと考えられる。

ここまでの議論をふまえて、話題化構文の文頭に生じる名詞句について、次の形の語用論的制約を提示する。

- (37) **More Informationally Relevant Constraint (MIRC):** Topicalized elements should be more informationally relevant to the preceding discourse than any other element(s) in the sentence.

4. その他の構成素の話題化

英語には、名詞句以外にも、次に示すように、文中の様々な構成素が文頭の位置に移動していると考えられる構文が存在している。(38)は動詞句、(39)は形容詞句、(40)、(41)、(42)は前置詞句、がそれぞれ文頭の位置に生じているものである。

- (38) a. They have promised to finish the work, and *finish it* they will.
(Quirk *et al.* (1985:1377))
b. Mother insists that Mr. Jones stay in the Green Room, so *stay in the Green Room* he will.
(Ward(1988:196))
- (39) a. It is well known that Columbus made his first voyage to America in 1492. But *less well known* is his last voyage.
b. She took the basket. *Packed tightly at the bottom* were three foreign newspaper.
(Fukuchi(1985:115))
- (40) a. I found a glass case on the table. *In the case* were trophies.
(Fukuchi(1985:115))
- (41) A: We did it in the backseat of a Ford.
B: *In a Ford* you did it?
(Ward(1988:112))
- (42) Keith Sebastain had given me detailed instructions on how to find his house; he was to meet me there with the money. I drove up the driveway and got out of my car. Just as the car door closed, I heard the main door to the house open. *Out of the house* stepped the Sheriff.

(Gray(1976:7))

これらの構成素が話題化され、文頭に移動する場合には、前節までに見た名詞句の場合よりもはるかに強い制約が働いていると思われる。次の (43b), (44b), (45B1), (46b), (47B2), (48B2) が示すように、これらの例では、情報の焦点となっている要素が話題化され文頭に置かれることが許されない。

(43) a. Tchaikousky was one of the most tormented men in musical history. In fact, one wonders how he managed to produce any music at all. But *produce music* he did.

b. Tchaikousky was one of the most tormented men in musical history.
#But *produce music* he did.

(Ward(1988:48))

(44) a. Mother insists that Mr. Jones stay in the Green Room, so *stay in the Green Room* he will.

b. I put Mr. Jones in the Green Room, #and *stay in the Green Room* he will.

(Ward(1988:196))

(45) A: How do people feel about what happened?

B1: Well, #*angry* Joe feels. But *vengeful* he doesn't feel.

B2: Well, Joe feels *angry*. But he doesn't feel *vengeful*.

(Ward(1988:137))

(46) a. I went grocery shopping. It was crowded.

b. I went grocery shopping. #*Crowded* it was.

(Ward(1988:116))

(47) A: I'm looking for my friend Rose.

B1: Rose was sitting among the guests of honor.

B2: #*Among the guests of honor* was sitting Rose.

(Bresnan(1994:85))

(48) A: Hey, mom, have you seen my gym shirt? I'm in a big hurry to get to the bus stop.

B1: Your gym shirt is in the hall closet.

B2: #*In the hall closet* is your gym shirt.

(Birner(1994:245))

きわめておおまかな言い方をすれば、これらの構成素が話題化され文頭の位置に生じるのは、先行する談話に現れたものをそのまま同じ表現形式(言語形式)で反復するような場合に限られるようであり、話題化される要素が先行する談話とより関

連性の強い情報を表すものであることを述べた語用論的制約(37)が、これらのデータにも適用できると考えられる。しかし、文頭の位置に移動され、話題化される統語範疇によりそれぞれ個別の問題があり、それらの分析についてはまた別の論考に譲ることとする。

5. 残された問題点

前節までに、話題化され文頭の位置に生じる要素に対する語用論的制約(13), (37)の有効性について論じてきたが、これらの制約ではうまく処理できない例がある。次の例を考えてみよう。

(49) A: Why is it so noisy on the second floor?

B1: # *The television* they're listening to.

B2: They're listening to *the television*.

(Ward(1988:74))

(50) a. We bought a new car. # *Lots of leg room* it has.

b. We bought a new car. It has *lots of leg room*.

(Ward(1988:116))

(51) A: Is that your dissertation?

B1: # *The first half* it is.

B2: It is *the first half*.

(Ward(1988:117))

それぞれ先行する談話で喚起されている情報と、後続する文で話題化されている名詞句が表す情報との関連性は高いと考えられる ((49)では「騒々しい理由」と「テレビの音」、(50)では「新車」と「車内の広々とした足元のゆとり」、(51)では「博士論文」と「その前半部分」)が、実際の談話では、容認不可能になっている例である。今後、これらの例をも説明できるように、第3節で提示した語用論的制約(37)に修正を加えながら、より有効な説明原理を検討していかなくてはならない。

6. 結語

話題化(topicalization)にかかわる構文は、文中の構成素を左方向へと、かつ文頭の位置へと移動させたものと考えられる。一般的に言って、英語においては、文頭に生じる要素は、文の主題(theme)であり、伝達上は相対的に情報量の少ないものであるのが自然である。本稿で特に考察を加えた「焦点話題化構文」の前置された名詞句も、結局はこの談話上の大原則に従うものであると考えられる。すなわち、それらは明示的にであれ非明示的にであれ、先行する談話においてすでに喚起され

たものと関連性の強い情報値をもつものである。これを、語用論的制約(37)という形で提示した。

註

* 本稿をまとめるにあたって、西原俊明氏（長崎大学・教養部）から貴重な御助言を賜わった。また、英語例文の容認可能性の判断については、長崎大学外国人教師 Giles Parker 氏の協力を得た。この紙面をかりて、心から感謝の意を表したい。

1. 「話題」という用語は、談話の話題(discourse topic)という意味においてもしばしば用いられるが、ここでは、個々の文、つまり、単一の文の中での話題(sentence topic)という意味で用いている。

2. Halliday(1967:212)によれば、'theme'とは次のように定義されている。

“The theme of a sentence is based on the order of constituents in the sentence; it is what comes first. It is being talked about, the point of departure for the clause as a message.”

3. Gundel はさらに、Focus Topicalization は、統語的には、それに対応する分裂文(cleft sentence)の基底構造から派生し、他方、Topic Topicalization は、それに対応する左方転位文(left-dislocated sentence)から派生すると主張している。詳しくは、Gundel(1974:183)を参照されたい。また、Culicover(1991)では、Topic Topicalization と Focus Topicalization との明確な区別を支持する統語的特徴が示されている。第1は、Focus Topicalization 構文からの要素の抜き出し(extraction)は可能であるのに対し、Topic Topicalization 構文からの抜き出しは不可能な点である。

(i) a. LAST year we were living in St. Louis.

b. Last year in St. LOUIS we were living.

(ii) a. Last year, we were living in St. Louis.

b. *Last year, in St. Louis, we were living.

第2は、Focus Topicalization には Weak Crossover効果が生じるのに対し、Topic Topicalization にはそれが生じない点である。

(iii) a. *ROBIN_i his_i mother really appreciates.

b. Robin_i, his_i mother really appreciates.

(iv) a. *To ROBIN_i his_i mother gave lots of presents.

b. To Robin_i, his_i mother gave lots of presents.

詳しくは、Culicover(1991:61)を参照されたい。

4. 「情報の焦点」という用語の定義については、残念ながら、これまで研究者間の統一見解が得られていないようであるが、ここでは、ある情報単位 (information unit) の中で音調核強勢 (intonation nucleus) が置かれる要素を情報の焦点と呼ぶことにする。情報単位とは、話し手が恣意的 (arbitrary) に決める発話の中でメッセージの一区切りと考えられるものである。一般的には、「旧情報」と「新情報」をになう2つの要素から成り立っていると考えられている。
5. Prince(1981)は、名詞句の話題化に関わる構文を、それぞれの談話の中でもつ機能に基づいてTopicalization, Focus-Movement, Yiddish-Movementの3つのタイプに下位分類しているが、ここでは、この議論には立ち入らないことにする。
6. ここでは、談話文法の記述の慣例に従い、談話における容認不可能な(不適切な)文を、#の記号を用いて示すことにする。
7. ここで用いる「談話」という用語は、一続きの口頭による談話、または、書かれた文章を指すものとする。
8. 「新情報」・「旧情報」という用語の定義についても、研究者の間で明確な一致を見ないまま用いられているようであるが、そのことがまさに議論上の様々な問題を引き起こしていることになる。ここで、いくつかの、主な定義を紹介しておく。

“Old Information is the information already supplied by context (perhaps by a preceding part of the discourse). New Information is the one which has not been prepared for by a preceding part of the discourse.”

(Quirk *et al.* (1985:1357))

“Old Information is what is already known or predictable to the listener. New Information is what is new or unpredictable to the listener.”

(Halliday(1985:275))

“New Information is the information which the speaker assumes not to be in the consciousness of the hearer at the time of utterance.”

(Penhallurick(1984:40))

“Given Information is that knowledge which the speaker assumes to be in the consciousness of the addressee at the time of utterance.”

(Chafe(1976:30))

“Old Information is the sum of ‘knowledge’ evoked in a sentence which a speaker assumes to be already available in the hearer’s mind at the time of utterance. New Information is the one which a speaker assumes is added to an

already existing stock of knowledge in the hearer's mind.”

(Lambrecht(1994:45))

談話の視点から見て、これらの従来の定義に共通する問題点は、ある要素のもつ情報値についての判断が ‘old’ か ‘new’ かどちらかという、いわば、二元論的判断で行われるということであろう。しかし、実際の自然な英語の談話を注意深く観察すると、ある要素のもつ情報値は、あくまで相対的なとらえ方をすべきではないかと考えられる。この点をふまえて、「新・旧情報」という概念の規定については、さらなる修正が加えられなければなるまいが、今後の課題としたい。

9. きわめて一般的には、英語においては「文末焦点の原理」(end-focus principle) に従い、文末の位置に情報の焦点が生じるのが自然である。そして、この文末焦点を示す要素が新情報の核として機能することになる。また、情報の焦点が文末以外の位置(文中や文頭など)に生じる場合には、次の例が示すように、通例、新情報を表すと考えられている。

(i) a. (Who's going to the races?)

WE'RE going to the races.

b. (Have you decided whether you're going to the races?)

Yes, we ARE going to the races.

(Quirk *et al.* (1985:1364))

10. 自明のことではあるが、ある言語形式とそれが談話上表す情報値とは、基本的には恣意的な関係にあることを忘れてはならない。たとえば、ある談話において新しい表現形式が現れたからといって、短絡的にそれが新しい情報を表すとは言えないし、逆に、すでに用いられている表現が必ずしも旧情報を表しているとも言えないのである。Lambrecht(1994:47)も同様の指摘をしている。

“The information conveyed by an element cannot be factored out and matched with individual sentence constituent. In particular, the difference between ‘old information’ and ‘new information’ cannot be equated with the difference between ‘old referents’ and ‘new referents.’”

11. Prince(1981:249)では、先行する談話との関連性の視点から、ある要素の表す情報値の段階を次のようなスケールとして提示している。一番左側の evoked information が最も関連性が強く、一番右側の Brand-New Information が最も関連性が弱いということになる。

Evoked > Unused > Inferrable > Containing Inferrable > Brand-New Anchored > Brand-New

これに従えば、話題化構文の話題化された要素は、その文中の他の要素よりこの

スケール上のより左側のランクに位置する情報を表すものでなければならないことを予測することになるが、この点についてはさらに詳細なデータの検証が必要であり、別の論考に譲ることにする。

12. つまり、従来の定義に従えば「旧情報」を表す要素が話題化されるということになるが、ここで分析の対象としている名詞句の話題化に関して言えば、問題となるのは聞き手の意識の中にとり出しやすい形であるかどうかの判断ではなくて、むしろ、先行する談話の流れの中で喚起されやすい情報として存在しているかどうかに関わっていると考えられる。
13. しかし、例えば、レストランで食事をしている等、場の脈絡が非常に明確な場合には、次の例のように話題化構文を用いて話を切り出すこともありうるであろう。例えば、JohnとMaryが、しばらく全く会話を交えない状態であるレストランに入り、そして席につくやいなや、いきなりJohnが次のように会話を切り出す場合である。

John: *Fried eels* I'd like to eat, today. What would you like to eat, Mary?

Mary: *Tuna sandwiches* I like to eat.

このJohnの発話の話題化構文は、先行する言語的脈絡がなくともレストランで食事をしようとしている場面という、いわば、きわめて明確な非言語的脈絡があれば、容認可能であると判断されるであろう。つまり、話題化されている *fried eels* という名詞句は、ここでの非言語的な脈絡にきわめて関連性の高い情報を表していると判断されるからである。

14. もっと言えば、談話の視点からすれば、Topic Topicalization 構文と Focus Topicalization 構文という2つのタイプを全く対等な関係でとらえるのは不自然であると考えられる。英語における自然な談話の流れに生じる話題化構文を注意深く観察すれば、それらは一般に、語用論的制約(13)や(37)に従っており、話題化された要素の右側に生じる部分が、談話上ほとんど重要な意味情報をもっていない特殊なケースが Focus Topicalization 構文であるととらえるべきであろう。

REFERENCES

- Alexander, L. G. 1988. *Longman English Grammar*. London: Longman.
- Birner, B. J. 1992. *The Discourse Function of Inversion in English*. Northwestern University dissertation.
- Birner, B. J. 1994. "Information Status and Word Order: An Analysis of English Inversion." *Language* 70:2. 233-259.
- Brend, R. M. 1986. "Text editing," *Word*. 37, 1-2, 77-81.

- Bresnan, J. 1994. "Locative Inversion and the Architecture of Universal Grammar." *Language* 70: 1. 72-131.
- Chafe, W. L. 1970. *Meaning and the Structure of Language*. Chicago: University of Chicago Press.
- Chafe, W. L. 1976. "Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics and Point of view." *Subject and Topics*, ed. by Li, C. 25-55. New York: Academic Press.
- Culicover, P. W. 1991. "Polarity, Inversion, and Focus in English." *Proceedings of the 8th Eastern States of Conference on Linguistics*. 46-68.
- Foley, W. and R. D. Van Valin. 1984. *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fukuchi, H. 1985. *Dannwa no Kouzou*. Tokyo: Taishukan.
- Garcia-Zamor, M. A. 1972. *Deep Structure, Intonation and Semantic Interpretation in English*. Ph. D. dissertation. University of Texas.
- Givon, T. (ed.) 1983. *Topic Continuity in Discourse*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gray, N. 1976. *A Discourse Analysis of Certain Root Transformations in English*. Indiana University Linguistic Club.
- Gundel, J. 1974. *The Role of Topic and Comment in Linguistic Theory*. University of Texas dissertation.
- Gundel, J. 1985. "'Shared Knowledge' and Topicality." *Journal of Pragmatics* 9. 83-107.
- Halliday, M. A. K. 1967. "Notes on Transitivity and Theme in English," *Journal of Linguistics* 3: 1, 199-274.
- Halliday, M. A. K. 1985. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Hankamer, J. 1974. "On the Non-Cyclic Nature to Wh-Clefting." *CLS* 10. 221-233.
- Joshi, A. K., B. L. Webber and I. A. Sag. (eds.) 1981. *Elements of Discourse Understanding*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, G. and J. Svartvik. 1975. *A Communicative Grammar of English*. London: Longman.
- Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Muraki, M. and S. Saito. 1978. 「生成意味論」『意味論』現代の英文法 2. 東京: 研究社.
- Prince, E. F. 1981. "Topicalization, Focus-Movement, and Yiddish-Movement: A Pragmatic Differentiation." *Proceedings of the Seventh Annual Meeting*, Berkeley Linguistics Society. 249-264.
- Prince, E. F. 1984. "Topicalization and Left-Dislocation: A Functional Analysis." *Discourses in Reading and Linguistics*, ed. by White, S. J. and Teller, V. 215-225. Annals of the New York Academy of Sciences.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1972. *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the*

English Language. London: Longman.

Rochemont, M. 1986. *Focus in Generative Grammar*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.

Rodman, R. 1974. "On left dislocation," *Papers in Linguistics* 7. 437-66.

Thomson, A. J. and A.N. Martinet. 1980. *A Practical English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.

van Dijk, T. A. 1977. *Text and Context: Explorations in the Semantics and Pragmatics of Discourse*. London: Longman.

Ward, G. 1988. *The Semantics and Pragmatics of Preposing*. New York: Garland Publishing, Inc.

Yasui, M. 1978. *Gengai no Imi*. Tokyo: Kenkyusha.

Yasui, M. 1978. *Atarashii Kikiteno Bun-pou*. Tokyo: Taishu-kan.

(Received October 30, 1996)